

フィリピンへのボクシング遠征

WBC 世界ユース・シルバーフェザー級王座決定戦 (2011.02.16-20)



2月16日(木)曇り

今回マニラ行きの航空会社はアメリカのデルタ航空を利用した。デルタ航空の場合はアメリカから成田を中継しマニラへ、更にシンガポールまで飛んでいく路線である。従ってアメリカの都合のいい時間に合わせているため成田発は18時25分の夜行便となる。しかし成田空港の離陸飛行機が混んでしまい、乗客は全員機内に乗り込んでいるのだが1時間ほど順番待ちで待機させられてしまった。マニラ空港には23時に到着したが入国審査が非常に混雑しており、手荷物を受け取りホテルに到着したのは翌日2月17日の1時だった。

空港には今回のタイトルマッチのプロモーターを行なっているデボ・エロルデさんが迎えに来てくれていた。デボさんはマニー・パッキョオが登場するまでフィリピンボクシング界の英雄であったフラッシュ・エロルデ選手の息子さんである。身長はあまり高くないが胴回りがでっぷりした肥満体型である。大きな身体を揺すらせながら大の姿を確認すると、背が大きいね、と一言。デボさんは出迎えの人は通常は入れない手荷物受け取り場所まで入っての出迎えであった。デボさんの運転で空港から20分ほどのホテルまで移動した。マニラに到着しての印象は街灯も少なく暗い感じだった。深夜のため道路を走る車はまばらであったが遅い時間にも関わらず路線バスが走っているのが目に止まった。

『ORCHID GARDEN SUITES HOTEL』という名前のホテルに到着後、翌日の朝食時刻と行動予定の確認が行われた。朝食後、大と貴志マネージャーと升田トレーナーはフィリピン・ボクシングコミッショナーに出かけ、フィリピンでのライセンス取得手続きを行うことになった。部屋割りは、大と升田トレーナーが607号室、私と弟が805号室、久保マネージャーが1004号室、貴志マネージャーが1405号室、と4部屋に分かれることとなった。

2月17日（金）曇り

朝食中にデボさんが迎えにきて大と貴志マネージャーと升田トレーナーはフィリピン・ボクシングコミッショナーに出かけた。フィリピンで試合をするためのライセンス取得手続きが目的である。大は試合前の減量中であるためレストランには顔を出さず、日本から持参したプロテイン類で食事を摂っていたようだ。

私と弟は午前中の用事がないのでホテル近くの地理確認も兼ね、近くの『ハリソン・プ



ラザ』というショッピングセンターに買い物に出かけた。教会も同居している3階建ての大きな建物で色々な店が入居していた。中央通路には屋台のように様々な店があり、いわゆるバッタものといわれる偽物の時計やバッグが売られている。私がマニラに来て初めてかけられた声は「だんな、安いポルノビデオがありますよ。いかがですか」という誘い文句であった。歩いているだけで次々に「偽物あるよ」「安

いよ」「寄っていかない」等の誘いの日本語で呼びかけられる。

私は日本円をフィリピン通貨のペソに交換するために銀行に入っていった。入り口には肩から自動小銃を下げた警官が入店する一人ひとりを鋭い眼差しでチェックしている。ショッピングモールの入り口にも数人の警官が立っており、フィリピンではそのような姿が当たり前のこととして日常化しているのである。日本から来ると、こういう武装警官が立っている風景には馴染めない。通貨の交換率は2円が1ペソである。小遣いとして私は1万円、弟は5千円を交換した。

プラザ店内を一通り回ったあとスーパーマーケットに酒類を買いに入った。魚介類、肉類、野菜、果物などの生鮮食料は豊富に売られていた。目的の酒類コーナーに行くと地元

のサン・ミゲルビールの330ml 缶ビールが30ペソ=60円である。日本の麒麟1 搾りは40ペソ=80円であり、ミネラルウォーター500ml は10ペソだった。それに消費税の2.5%が外税として加算されていた。結局、ワイン1本、ビール14缶、ミネラルウォーター4本、ツマミの乾き物5種類、T字剃刀2つの合計は1102ペソ=2200円であった。日本のスーパーの半値という感じだった。

12時頃に大たちがコミッションから戻ってきたのでホテル近くの中華料理店『rai-rai-ken』に昼食を食べに出るが、大の姿は減量中のためその場になかった。私は麻婆豆腐と炒飯を頼んだ。思ったより美味かった。

昼食後はハリソン・プラザで買い物をするという三迫ジムの3人と別れて私たち2人は歩いてマニラ動物園に出かけた。入園料は大人40ペソだった。安いと思った。中に入るとこれ程まで子どもがいるのかと思うほど子どもたちで溢れていた。少子化の日本では決して出会うことのない光景だと思った。フィリピンでは女性は15~16才で子どもを生んでしまうのでやたら子どもが多いのだ。義務教育ではないことによる教育不足と貧困のための悪循環だと思える。貧しい国ほど子どもが多い。夜の9時頃になっても路上で遊んでいる子どもがたくさんいる。町を歩けば5~6才の子どもが手を出し続け物乞いする。屋台ではおかげに醤油のようなものをかけて食べている。道路に寝そべる子どもたち。ばら売りのキャンディを売るおばさん。パイナップルやマンゴーの屋台。力車の行列。ジブニーの群れ。道路脇に溜まった油の浮いた水。全てが混沌としている。

15時にホテルから歩いて10分ほどのエロルデビル3階にあるエロルデジムに大の最終調整に出かけるので一緒に行った。私たちが伺ったエロルデジムは12ヶ所に設置してあるうちのひとつだという。町は雑然としている。道路に寝ころんでいる人も見受けられる。ジムに上がっていく階段の踊り場にも子どもが寝転んでいる。気温が高いためにコンクリートに寝転ぶことによって体温が冷やされることによる冷房効果を狙っているようだった。



ジムに入ると椅子に腰掛けているだけで汗が噴き出してくる。壁にはフラッシュ・エロルデ選手の現役当時の大きな写真が貼ってあり、日本のファイティング原田選手とも激闘を展開した往年の名チャンピオンである。ジム内は広くないがリングが二つ設置されていた。ジムではダイエット効果を狙う女性が5人熱心にトレーニング

グを続けていた。勿論、男性も各々汗を流している。大も準備体操から始めシャドウボクシングにミット打ちを行なった。リングの中に入って升田トレーナーとミット打ちを開始すると、それまで各自でトレーニングをしていた全員が動きを止め、大のトレーニングに見入っていた。早い動き、パンチのキレ、ミットに突き刺さるパンチ音が凄い。ラッシュの回転も早いのでみんな唖然としているようだった。1時間弱の練習後に体重計に乗ったところ125.6ポンドでフェザー級リミットである126ポンドより0.4ポンド低く、減量は順調に進んでいっているようで明後日の試合が楽しみだ。

大と升田トレーナーは練習終了後、昨年三迫ジムの椎野選手とWBCインターチャンピオンタイトルマッチを戦い、激闘後に11ラウンドでTKO負けした選手と別のプロ選手とともに記念写真に収まった。大は対戦相手であるディゾン・カグオン選手の情報は持っていなかったが、リングマットが日本と比べると柔らかいことを足の裏が感じ取った。そこから相手はフットワークを使わずに打撃戦に巻き込む戦法で来るだろうと予想した。実際、試合展開は大の予想したものとなった。

昨年のWBC総会で前日計量は試合開始の36時間前と決定されたので、今回は明日午前9時に公式計量が行われる。試合は10試合行われるメインとなるので夜の9時頃だろうとのことだった。明朝7時、計量に向かうためプロモーターのデボさんの車がホテルまで迎えに来るといふ。

夕食は大の体重が規格内に入ったということもあり、大を含めてマラテ地区の中心地に



ある日本料理店である「日本橋亭」にみんなで出かけた。金曜日の夕方とあって道路は大渋滞でタクシーも中々掴まらない。交差点に信号はあるのだが前が渋滞していても青になると待たずに交差点に侵入するためグチャグチャになりクラクション音が止むことはなく神経を余計高ぶらせる。地元の人はそのような光景は当たり前のことなので遠慮などしていたら進むこともでき

ないのだ。タクシー待ち場所を3ヶ所変え1時間ほどたってからやっとタクシーを掴まえた。タクシーに乗ったのはいいが料金メーターが設置されていなかったため、今度は運転手と料金の問題でひと悶着。運転手は250ペソを要求したが200ペソで手を打った。食事の帰りにメーター設置のタクシーにホテルまで乗ったが料金は120ペソであ

った。タクシーは渋滞を避け裏道を通りながら10分で「日本橋亭」に到着した。「AKB 48」のネオン輝くカラオケバー、お好み焼き、たこ焼き、焼肉、など日本語の看板が目につく一帯だ。大は、かけそばを注文し2口3口蕎麦を啜っただけで残りを私によこした。明日の計量をパスするまでが大にとっては第1段階であり、まだまだ減量との戦いが続いていることを実感する。私は上握り寿司と瓶ビールを2本頼んだ。寿司は美味かった。

フィリピンの平均月給は3万円、日給は600円というのが相場だというが、上握り寿司は500ペソ=1000円である。1.5日分の日給を1度の食事で食べてしまうのだが、日本人にとっての貨幣感覚とフィリピンの貨幣感覚とは全く違っているのが分かる。日本橋亭はフィリピンの人たちが来られるような店ではないことが分かった。しかし欧米人の年寄りや日本の若者と連れ立って食事をしているフィリピーノ女性の姿も多く見かける。その代償が何であるかは明らかでないことでもある。

2月18日(土) 曇りのち晴れ

公開計量に出かけるのに先立ちホテルの玄関前で写真を撮った。明日の朝刊に地元紙に



日本からタイトルマッチでフィリピンにやって来た三迫ジム関係者として紹介されるという。7時に大と升田トレーナー、貴志マネージャーはプロモーターの車で予定通り出発したが、私たちが頼んだ迎いの車は来なかった。30分待っても来ないのでタクシーを頼んで30km南下した計量場に出発した。後で頼んだ車の状況を確認したところ、運転手は

寝過ごしたのでホテルには行かなかったとのこと。約束はあってないようなものなのだ。

高速道路を使用し1時間弱でガソリンスタンドの2階にあるボクシングジムである計量会場に到着した。2階のベランダには明日のタイトルマッチの横断幕が張られていた。大の写真も日の丸と共に大きく印刷されていた。到着してすぐに事前計量のため体重計に乗って体重を確認すると1ポンドオーバーとのこと。緻密の大が体重オーバーなどするはずはないのだが、公式計量を行う体重計でオーバー表示されているので文句を言っても始まらない。測定時刻までの1時間弱で1ポンド落とさなければならない。大は唾を吐きながら体重を落とすことに務める。

明日試合を行う選手が次々に到着し事前計量を行うが殆どの選手が体重オーバーとなっ

ており、トイレに行くと盛んに唾を吐いている姿が目につく。私は体重計の表示が実際より重く表示されるのではないかと考えた。そうでなければほぼ全員のプロ選手が体重オーバーなどは考えられない。

計量は9時の予定であったが30分遅れた9時半にメインイベントの選手から開始され、



大が1番目の計量だった。WBCの役員、プロモーター、両陣営の代表が体重計の表示を確認する。WBC役員が「126ポンド。オーケー」と言葉を発し、大は1時間ほどで450gの減量を行い1発計量通過で第1関門を突破した。大のホッとした和やかな笑顔が印象的だった。大は事前計量で1ポンドオーバーが表示されたときはビックリしたに

違いない。しかし少しも表情を変えずに淡々と唾を吐きながら減量に取り組んでいた。これで思い切り食事が可能となった。対戦選手も124ポンドで1発計量通過だった2人が並ぶと身長は大のほうが10cmほど高いように感じられた。リーチも大の方が長いだろう。写真を撮影しお互いの健闘を誓って握手をして別れた。

計量会場には緑色のWBC世界ユース・シルバーフェザー級チャンピオンベルトも届いていた。持ってみると結構な重さである。その横でファイトマネーの支払いがプロモータージムの女性マネージャーからUS\$で貴志マネージャーに手渡された。今回の大のファイトマネーは3000\$で3分の2の2000\$を受け取るようになった。

その後、両選手のマネージャーとトレーナーはWBC役員、ジャッジ、レフェリーと明日の試合ルールの確認で1階の別室に移り、大は医師の血圧測定、問診などのメディカルチェックを受け、一連の前日計量は終了した。さあ、明日はいよいよチャンピオンベルトをどちらの選手が手にするのかの決戦である。大に計量を終えての感想を聞くと、手先が痺れている状態とのこと。大がフェザー級まで体重を減らしたのは今回が初めてである。水分を極端に絞った故に身体自体が水分を欲しているとのことで、計量終了後に飲んだポカリスエットが身体の細胞一つひとつに浸み込んで行く感覚が分かるようだと言っていた。

昼食は大が生姜焼き定食を食べたいというので昨晚伺った日本橋亭に出かけた。私は刺身定食を頼みビールは飲まなかった。昨晚、上握り寿司を食べて魚介類の美味さは確認していたが、刺身定食もやはり美味かった。

久保マネージャーは食事中にトレーナーの吸う煙草の煙が大の方にかかるとすかさず注意する。大には自分で頼んだミネラルウォーターをコップについで手渡す。試合前に選手と同室のトレーナーがアルコールの臭いをさせるなどもってのほかと注意する。そこには常に大のコンディションを最上の状態で保つように神経を配っているプロの姿があった。

昼食後は近くのロビンソン・コマーシャル・コンプレックスという4階建ての巨大ショッピングセンターに出かけた。1階にマニー・パッキョオの店があった。私は1枚760ペソのTシャツを買った。1階を歩いているだけで「偽物の安いものがあるよ」とひっきりなしに勧誘の声が掛かる。私は無視するが一緒に出かけた人は「偽物」と知って買い物をしていた。

2月19日(日) 晴れ

私と弟が食事を摂っていると升田トレーナーと大がやってきた。大の顔色は輝きを増していた。減量で萎びていた大の身体が計量後に昼食、夕食を摂ったことにより急速に生気が蘇ってきているのが分かる。大はいつものように落ち着いて食事をしている。しっかりおかわりもしている。昨晩は試合前日にも関わらず熟睡できたという。食事中の受け答えや落ち着いた態度から私は大の勝利を確信し、千葉や群馬で勝利を願っている家族に次の文でメールを送信した。

「昨日の計量も無事パスし、昨日昼食から大も一緒に食事をしていました。萎びていた大に生気が戻ってきました。今朝も一緒に食事を摂りましたが普段通り落ち着いており、食事もしっかり食べていました。昨晩もぐっすり眠れたと言っていました。今日4時にホテルを出発して試合会場に向かい、第1試合は6時開始です。大はメインで第10試合の予定なので9時頃スタートです。結果が分かったらメールします。日本との時差は1時間なので遅くとも11時には結果がでます。大の落ち着きからみて、大の勝利を確信します。では、またね。」



食事後、トレーナーとホテル周辺の散歩に出かけた大は1時間ほど戻ってきて、今度は私たち2人と一緒に散歩に出るという。10時過ぎに私たち3人はマニラ湾のヨットハーバーへ1時間の予定で散歩に出かけた。朝は太陽が出ていたが雲がだいぶ出てきていた。カンカン照りだと気温が上がって体力的にま

いってしまうが曇り空の方が活動しやすい。ホテルから10分ほど歩くとマニラ湾に出た。日曜日なので防波堤からの投げ釣り客で一杯だった。湾内のため水は濁っていた。海面にはボラの稚魚が物凄い数で泳いでいるが釣れている人はあまり見受けられなかった。

「対馬」という看板が出ている日本料理店があったので行ってみると、生け簀の水槽に魚や海老が入っていたが死んでいる海老が多く目についた。湾内に繋留されているボートと遠くのビル群をバックに大と一緒に写真を撮った。

昼食は試合開始が21時ごろと遅いのに合わせてロビーに13時に集合して大の希望に沿ってイタリアン料理店に向かった。昨日買い物に出かけたロビンソン・コマーシャル・コンプレックスの1階にある店だった。私は海老やムール貝が載っているシーフード・スパゲッティとガーリックトーストを頼んだ。出てきたシーフード・スパゲッティは予想通りだったが、ガーリックトーストは予想以上だった。ガーリックが浸み込み焼きあがったばかりのトーストの上に柔らかチーズが載ったもので初めて食べる味だった。非常に美味かった。大はミートボール・スパゲッティを頼んだが、出てきたのはテニスボールほどの大きい肉団子が2つ乗っていたので一つだけ食べた。残りを私に寄こしたが肉のぎっしり詰まった団子だった。満腹満腹、満足満足の昼食だった。

第1試合の開始が1時間早まり17時からとの情報が入ってきたので15時にホテルを出発した。試合会場は昨日前日計量を行なった場所の近くであるというが、昨日同様に運転手が初めて行く場所なので通行人に場所を確かめ探し出すという形だった。勿論、車にカーナビなどは付いていない。ようやく探し当てた会場は1000人収容できるサンタロサ市のバスケットボール場だった。屋根はついているが風通しのいい造りだった。入り口にLIVE中継するための地元テレビ中継車が止まっていた。その会場に特設リングを組み立て、リングから3mほどの位置に金網フェンスを廻らしたものだ。私はリングを金網フェンスが取り囲むという風景に初めて出会った。興奮した観客がリングに殺到しないための防御策なのだろうかと考えた。正面にタイトルマッチの横断幕が掲げられ、反対側にはテレビカメラが設置され放送設備からは音楽が流されていた。



WBCの世界タイトルマッチなので4ラウンドと8ラウンドにジャッジの採点公開を行うとのこと。アナウンサーの発表が英語になるか現地タガログ語になるかは不明なので久保マネージ

ヤーがコミッション席に確認しに行くことになった。昨年フィリピンで戦った椎野選手のタイトルマッチ時のジャッジ採点は極端の地元採点だったので、今回の対戦相手はエロルデジム所属選手ではないので公正な採点をするように強く申し込んだ、と貴志マネージャーが言っていた。

私たち三迫陣営には試合会場の隣の建物の2階の簡易裁判所になっている部屋が関係者控え室として用意されていた。部屋の広さは10畳ほどで1792年の年号が記された州？のマークが壁中央に掲げられ判事の机と椅子、机の上には映画などでお馴染みの判事が叩く小槌が置かれていた。右壁には歴代の判事の肖像画が25枚飾られていた。対戦相手のフィリピン選手には控え室は用意されていなかった。

今回のボクシングのイベントはサンタロサ市のお祭りが2月17日～21日に行われており、そのお祭りイベントの一つとして企画されたもので入場料は無料とのことだった。ボクシングの試合に入場料を取るの先進国と言われている国だけで、他の国では入場料を取らないという。入場料など取ったら観客は集まらず、その代わりにビールなどを売ることによって収益を上げているとのことだった。

17時になっても第1試合は開始されなかった。ノンビリしたものである。結局、第1



試合がリングアナウンスされたのは18時20分だった。裏庭ではロケット花火が轟音とともに発射され煙幕が覆う。度々打ち上げられる花火によってボクシングの試合が開始されたことを市内に知らせているようだった。事実、夕食を終えたであろう市民が続々と会場に集まって来て戦っている両選手に声援を送っている。会場の外では万一の事態に備え

て緊急病院の救急車が赤と青のランプを点滅させながら待機している。

第1試合からテレビカメラが回っている。熱戦を帯びる会場にレフェリーも汗だくであり、インターバル時にはタオルで顔や首の汗をぬぐっている。試合予定では4回戦が3試合、6回戦が2試合、10回戦が5試合とされていたが終わってみたら9試合だった。

第1試合：引き分け

第2試合：TKO

第3試合：TKO

第4試合：TKO

第5試合：TKO

第6試合：判定

第7試合：判定

第8試合：判定

私は第5試合から金網の中に入り赤コーナー横の空いている椅子に座ってリング上の戦いを見ていた。隣に座っていた地元の方が話しかけてきたので、「私は今日のメインに登場する岩井大の父親で日本からやってきた」と伝えると驚きの声を上げ、度々フィリピンに来るのかと再度の質問に、初めてと答えた。その人はボクシング観戦を心から楽しんでいるように感じられた。

フィリピンのボクサーたちは様々な色のグローブを使う。日本の場合は赤と青の2色が基本だが、フィリピンでは、緑、黄、黒、赤、青、白、と実に色とりどりで艶やかだ。見ていると様々な色の花がリングの上で舞っているような感じだ。第6試合が始まる頃にラウンドガール2名が私の左隣の席に座った。色白でスラリとしたスタイルで口紅の赤が印象的な2人だった。

セミファイナルのだらけた試合が判定勝負で終了した。次はいよいよメインの最大の登場するタイトルマッチである。以下は、大のファンクラブ機関紙『ファイト』14号のために書いた原稿である。

2月19日、岩井大の三迫ジムへの移籍第一戦はフィリピンでのWBCユースシルバー



フェザー級王座決定戦となった。真冬の日本から熱帯の敵地に乗り込んでの一戦は心身ともにタフさが求められたが、試合を含めて終始冷静に対応した大は夜の10時20分開始という遅い時間にもかかわらずベストコンディションで試合に臨み、見事7ラウンド2分33秒でTKOを勝ち取り、23歳以下のWBCフェザー級初代世

界チャンピオンに輝いた。

試合会場はマニラ市から南へ30kmほど下ったラグーナ州サンタロサ市のバスケット場に特設リングを組み立てて行われた。7人对1000人という圧倒的アウェーの中で日の丸の旗を振りながら三迫陣営が入場してくる。リングアナウンサーの両選手紹介後に国歌の演奏が行われ、大は目をつぶり胸に手を当てながらリズムカルに足を動かしていた。対戦相手はフィリピンのディソン・カグオン選手(16戦11勝4敗・6KO)

1ラウンド

対戦相手の顔にジャブ、ジャブ、ジャブが小気味よくヒットする。続く右ストレートや左ボディも的確だ。

2ラウンド

ボディ打ちが決まっている。前半にこれだけ決まると相手選手の後半からの動きは極端に落ちるだろう。

3ラウンド

フィリピンの選手は思い切りパンチを振ってくる。当たればいいが当たらなければ本人が消耗するだけだ。ジャブを打ってこないため戦い方は単純だ。大はジャブを起点として攻撃を組み立てる。今日の大のパンチのヒット率は高い。



4ラウンド

対戦相手の動きが極端に悪くなってきた。前半のボディ攻撃がじんわり効いてきたのだ。大はプレッ

シャーを更に強めボディ攻撃を強める。

5ラウンド

大はラウンドを終始コントロールしていたが終了間際にバッティングで右眼を切った。その影響か終了10秒前に鳴らす拍子木の音をゴングと勘違いし自コーナーに戻りかけ相手の背後からの攻撃を許すことになった。

6ラウンド

前ラウンドのバッティング裂傷をヒッティングと判断された。出血が止まらなると試合をストップされTKO負けにされてしまうが、大は相手のパンチをもらわない。止血が上手

くいき、大はプレッシャーを益々強め対戦相手をロープに詰め狙い撃ちする。

7ラウンド

もはや勝負の行方は誰の目にも明らかになった。相手はフラフラだ。大は益々プレッシャーを強め対戦相手を追い詰め、距離を測ってストレート、アッパー、フックが相手選手に炸裂する。時たま相手が大振りのフックやアッパーを繰り出すがスピードが遅く、大は軽々とかわす。レフェリーは相手選手のダメージを考慮しストップのタイミングを図っているのが動きから分かる。大は対戦相手をロープに詰め狙い撃ちを続けていた2分33秒、レフェリーは両選手の間に割り込んで両手を交差させTKO宣言を行なった。

3人のジャッジの6ラウンドまでの採点は、60：54、60：54、59：55で、2人のオールマークを含め3者ともに大の勝ちを認めていた。大の圧倒的優勢のもとで試合は進められ、これ以上打たれると危険と判断しレフェリーがTKO宣言を行なった。完全アウェーの状態だったが勝利者宣言、ベルト授与には大に対して暖かい拍手が沸き起こっていた。観戦者の誰もが認める完璧な勝利だった。

レフェリーが両選手の間に割り込んでTKO宣言を行うやいなや貴志マネージャーと升



田トレーナー、貫セコンドの3人がリングになだれ込んだ。トレーナーは大を肩車しリング上を一周した。セコンドは日の丸の旗を振っている。リングアナウンサーによる勝利者の紹介、WBC役員からのチャンピオンベルトの授与、そのベルトを腰に巻いた大の手をレフェリーとWBC役員が高々と掲げる。大の笑顔が輝いている。本当に嬉しそうだ。観客も大の勝利に惜しみない拍手を贈っている。日本からやってきて圧倒的に強かった選手に敵国とはいえフェアに拍手を送ってくれたのだ。

私はリングエプロン下から写真を撮りながら大の戦い方を見ていたが1ラウンドから7ラウンドまで終始相手を圧倒していた。大がリングに上がるのはジム移籍問題もあって1年3ヶ月ぶりであった。私は大に勝負勘が戻っているかどうか心配であったが、そのような心配は杞憂に終わった。実にいい戦い方だった。それは1年間の苦しさを乗り越えた精神的な成長がもたらしたものだと思った。

リング上の興奮が収まり選手控え室に戻ると地元の選手が次々に入ってきて、「ナイス・チャンピオン」「ナイス・ハードパンチャー」「ナイス・ファイター」などの言葉とともに大とツーショット写真を撮っている。3月10日に三迫ジムの福本選手と戦う予定のWBCスーパーフライ級1位のシルヴェスター・ロペス選手も大と握手後に写真を撮っていた。私は試合結果を待つ千葉と群馬の家族に「TKO勝ち」のメールを送信した。すぐに妻から「やったね(^o^)」との返信メールが届いた。12時まで寝ずに試合結果が届くのを待っていたのだ。

負けると勝つとは雲泥の差だ。升田トレーナーは喜びを心の中に受け止めながら静かに淡々と大の両手のバンテージを外している。それとは正反対に貴志マネージャーは甲高く大きな声で地元の方やボクシング関係者と英語で話している。大の勝利にかなり興奮しているようだ。セコンドの貫ちゃんはうっすらと涙を貯めながらチャンピオンベルトをしみじみと眺め手で撫で回している。選手控え室に集まっているみんなが圧倒的なアウェー状態のフィリピンに乗り込んで見事に相手を打ち負かしチャンピオンベルトを獲得したことが心から嬉しいのだ。

私たちの控え室の隣の控え室を利用したアメリカ人医師は、大が5ラウンド終了間際に



切った右瞼の傷を確認したあと、縫わなければダメだと言った。縫合手術は明日朝の便で日本に帰るので日本の病院で受けることにし、まだ夕食を食べていなかったので祝勝会を兼ねて全員で食事に行くことにした。

大が焼肉を食べたいというので3度目の日本橋亭に行くことになった。高速道路を走って1時間で到着したが時刻は夜中の0時を回っていた。

大は今回も生姜焼き定食を頼んだ。私は上握り寿司と缶ビール2本だった。ひときわ美味しいビールと寿司だったのはいうまでもないことだった。大は公言通りチャンピオンベルトを獲得した。敵地での戦いとプレッシャーを跳ねのけた勝利は大に多くの教訓を与えたと思う。その教訓を今後の戦いに生かすために練習を更に強化し一歩一歩前進していこう。

2月20日(日)曇り

ホテルに戻ると2時を回っていた。空港に向かうためのロビーでの待ち合わせ時刻は5時である。シャワーを浴び荷物を整理したら3時となった。寝てしまったら起きられなくなる可能性があるので、そのまま弟と熱かった試合を振り返りながらビールや焼酎を飲みつつ朝を迎えた。